牧野立雄 9 INTERVIEWS

風のシグナル

宮沢賢治と現在をめぐる九つの対話

立松和平
Tatematsu-Wahei

松本健一
Matsumoto-Kenichi

木村光一
Kimura-Kōichi

高木仁三郎
Takagi-Jinzaburou

福島章
Fukushima-Akira

吉本隆明
Yoshimoto-Takaaki

村上陽一郎
Murakami-Yōichirou

唐十郎
Kara-Jyurou

山折哲雄
Yamaori-Tetsuo

キリン書房

立雄❾INTERVIEWS

風のシグナル

宮沢賢治と現在をめぐる九つの対話

キリン書房

インタビュアー紹介

牧野立雄（まきのたつお）
一九四八（昭二三）年一一月、愛知県瀬戸市に生まれる。少年期を名古屋で過ごし、六四年東京芝浦電気㈱名古屋工場の技能訓練生になる。六七年退職。六九年名古屋市立向陽高校卒業。上京。職を転々としながら宮沢賢治にめざめる。七七年三月法政大学通信教育部日本文学科卒業。四月盛岡へ移る。六月矢羽々政道と「つめくさ文庫」設立（七九年からは単独経営）。七九年本館伸也・佐藤明彦と同人誌『時圏』創刊。八七年キリン書房の吉田正美と出版活動を開始。

牧野立雄⑨INTERVIEWS
宮沢賢治と現在をめぐる九つの対話
風のシグナル
発　行●昭和一九八七年一〇月二五日第一刷
編著者●牧野立雄
装幀者●田村晴樹
発行者●吉田正美
発行所●キリン書房
〒020 盛岡市本町通2－14－22
電話 0196(23)7741
振替 盛岡六－一六二一八
印刷所●株式会社 熊谷印刷
定　価●一七〇〇円

牧野立雄 ⑨ INTERVIEWS

宮沢賢治と現在をめぐる九つの対話

立松和平①生きる場の文学 2
松本健一②〈うた〉の核心 38
木村光一③ユートピアの現在 68
高木仁三郎④核時代のつきあい方 100

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

福島　章⑤修羅としての青春　138
吉本隆明⑥悲劇の解読　168
村上陽一郎⑦科学と信仰のグランドスタイル　206
唐十郎⑧宮沢賢治の奇妙な歯ざわり　240
山折哲雄⑨宮沢賢治への問いと現在　266

風のシグナル

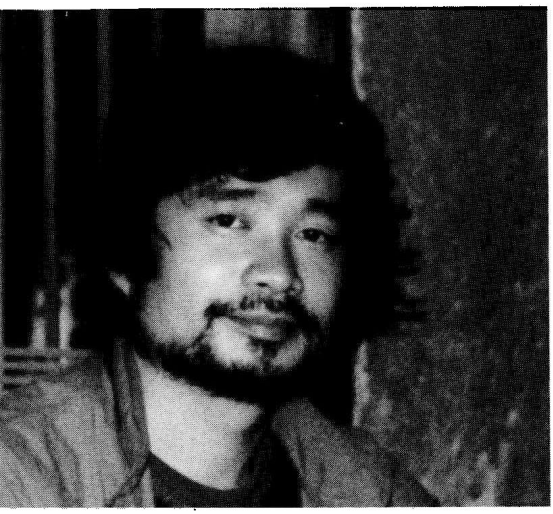
INTERVIEW①

生きる場の文学

「人間の生き方でさ、きまりなんかつかないじゃない。一つの問題かたづきゃ次の問題が出てくるしね。死んだ人間は、生き残った人間にバトンタッチしていくわけだ

「よ、いろんなものを。」

立松和平



Tatematsu—Wahei

一九四七（昭和二二）年一二月栃木県宇都宮市に生まれる。早稲田大学政治経済学部卒業。学生時代から東南アジアや沖縄を放浪。七〇年放浪体験をふまえた処女作『途方にくれて』が「早稲田文学」に掲載され、以後たて続けに作品を発表したが、七二年帰郷し、市役所に勤務するかたわら創作活動を継続。八〇年『遠雷』で第二回野間文芸新人賞を受賞。地方都市近郊の農村に生きる青年の激情を活写して、文学界に新しい風を送り込んだ。と同時に、小説だけでなく、ルポルタージュやTVのレポート、あるいは国際的なラリーに参加し、行動する作家としてのパワーを爆発させている。八五年度若い作家のためのロータス文学賞を受賞。

最新の著作として、『遠雷』三部作の完結篇『性的黙示録』、『太陽の王』『天狗が来る』『熱帯雨林』ほか。

■自分が生きるように小説の中で生きる

牧野●いま自分が、いわゆる都市化現象の激しい地方都市に住んでいることや主人公のひたむきな生き方に他人事じゃない切実さがあって、身近なドラマを見るような感じで『遠雷』を読みました。あれは前半の「村雨」(『文藝』一九七九年九月号所収)を書いて、急にふくらんでいったという……

立松●そうね、俺の書き方ってのはね、最初から全部構想をたてて書きはじめるんじゃないんですよ。要するに、その人間にとりつかれるような感じでやるんですよ。その人間になっちゃうわけ。又、その人間が自分でもあるわけだけども。キチッと構想をたてて人工的に作って動かしていく書き方じゃない。その人間になることによって、自分が生きるように、その小説の中で生きるんです。だから、ある意味では、等身大の人間しか書けない。そういう限界は、あったんですよね。『遠雷』なんかも等身大の、ちょっと実際の自分よりは若い設定をしてるけども、俺の考え方と似たような、というか、そのままですね。

『遠雷』(河出書房新社、一九八〇年五月刊)

◎汗ばんだビニールが眩しかった。よく見れば微小な水滴一粒一粒が虹を含んでいた。ふくれて重みが支えきれなくなると、水滴は涙のように流れ落ちた。そこから陽光が鋭く射してきた。満夫は汗に湿った丸首シャツを脱いで頭上の鉄パイプにかけた。黄ばんだシャツから湯気

だから、その人間と主人公と、それからまわりの副人物が、キチッとつかまえられると、作品がどんどん大きくなってくるんです。そういう書き方をしたのは、その前の長篇の『閉じる家』。それも全く同じです。そういう書き方は、やっぱりこう、日本の文学土壌に受け入れられにくいのね。短篇でキチッと何枚というふうな形で書いていくというような土壌なんでしょうね。

牧野●『閉じる家』を書いたら次には『遠雷』が出てこなきゃいけない、と『閉じる家』を読んでいて思いました。

立松●場所設定とかは違うけど、なかに出てくる人間は全く同じだからね、その『閉じる家』から『遠雷』にかけては。その前に『火の車』という作品があって、あれもそうですよ。その前もだいたいたどってはいけるんだけど、何というのかな、想像力とか手で作るんじゃないんだな。全てが俺だというふうな感じで書いているんですよ。

■『歓喜の市』——戦後を相対化する

立松●ただそれが、『歓喜の市』では少し変わってきたね。あれは、いろんな

が昇った。灼けた鉄パイプはうっかり握ると火傷をした。

午後から急に日射しが強くなった。たぶん今年一番の暑さだ。トマトの根が力強く土を噛み実をふくらませていく様子が浮かんだ。露地物のトマトはやっと苗を植えたばかりの頃だった。満夫は根元から地中温度計を引きぬいて見た。あわてて天窓を開き、ビニールをめくって隙間をつくった。柔らかく風が吹込み、蒸れた土のにおいの中にいたことに今さらながら気づいた。鉄パイプにさげたラジオから退屈なバイオリンの曲が流れていた。

ビニールの隙間から団地が見えた。コンクリートの真新しい四角の建物が三十、整然とならんでいた。どれくらい人間が棲んでいるのかわからない。団地の騒音が風に乗ってざわざわと流れてきた。

満夫はホースでトマトの根元に水をかけながら、床土の水の

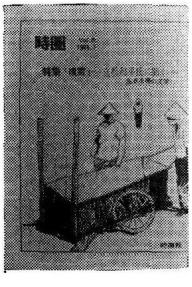
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

人間が出てくるから、自分一人の考えだけではできないすね。あの小説では全部が主人公だから。

牧野●そうすると、人間が洪水みたいにあふれて、戦後を相対化してしまうような、そんな感じの作品ですか。

立松●……だから目論見としては、『遠雷』と同じように、この辺の宇都宮あたりを舞台として書いているけども、現実の土地をモデルにしてるわけじゃないですよ。テキストだね、言ってしまえば。「どこにもない土地」ときみがここ（「遠雷の風景」）に書いているけど、「どこにもない土地」を作ってるわけですよ。それと同じ発想でね、歴史も作っちゃうわけ。空間軸と時間軸、それまでやっちゃうわけですよ。そうすると、物語が噴出してくるのは、書きたくなるのは、必然だと思うしね。あまりそういうふうに明確な方法意識を、俺は意識してるかどうか別なんだけど、いろんな人からそう言われるから、ああそうじゃないかなと思ったりするんだけどね。『歓喜の市』ってのは、戦後の歴史を……まるっきり組み換えるというか、途中から作品の中の歴史と現実の歴史が変わっちゃってもいいじゃないかと思うわけ。人間がちゃんと生きていればね、その作品の中で。

しみ具合をじっと見つめた。根は水をかぎわけ伸びていく。水が土に深くしみ込まないと根は上のほうにしか張らないのだ。水や追肥をおしまずにやると、トマトは日一日充実していくのがわかった。この六百坪のハウスには隅ずみまで満夫の気持が通っていた。トマト栽培二年目の今年は失敗するわけにはいかなかった。（『遠雷』の冒頭）



※『時圏』は一九七九年一月創刊の同人誌。その第五号で『遠雷』を特集し、小林芳弘「ラヴ・アップル」、牧野立雄「遠雷の風景」ほか六篇の『遠雷』に対するエッセイを載せた。

明治時代を書く構想があるし、幕末に取材した作品も、その辺のダンボールにいっぱい資料が入っている。幕末のこの辺の水戸天狗党という事件があってね。それから明治時代のも、俺の祖先の足尾の、鉱夫の世界のいろいろ。兵庫県の生野銀山から俺のひいおじいさんが流れてきたりしていて、もうかなり調べてあるんですよ。書こうと思えば今すぐにでも書けるんですよ。それぞれが、もう千枚を優に越える作品ばかりで……。

牧野●長篇ばかりですね。

立松●大きなものはね。例えば、『火遊び』みたいな作り方でね、短篇をたくさん重ねて、またその間に長篇を入れたりすると街ができる。街っていうか土地がね。それと、同じやり方で歴史もできるしね。これは、俺の仕事だなと今思ってるんですよ。

■帰郷——青春時代の酷しさ

牧野●ぼくは、長いこと宮沢賢治と向きあうようにしていろんなことを考えてきているんですけど、彼は二十五歳の冬に家出上京して、半年ほど東京で生活

『火遊び』（集英社、一九八〇年一月刊）

宮沢賢治（一八九六〜一九三三）詩人・童話作家。生前は全く無名であったが、没後、高村光太郎、草野心平、谷川徹三らによって紹介され脚光を浴びるようになった。一九二四年、心象スケッチ集『春と修羅』、イーハトヴ童話集『注文の多い料理店』を自費出版。

し、そこでまあ挫折みたいなことを体験して帰郷する。その後猛烈に書き始めるんです。そしてそのあたりで「修羅」という言葉が鮮烈に出てきます。そういう青年期の屈折について立松さんは、「鬱屈と激情」(『回りつづける独楽のように』所収)の中で中原中也の「帰郷」に触れながら語っていますね。そのエッセイ、胸にジーンと響いてきました。で今日、宇都宮駅の本屋に立寄ったら立松さんの新刊が出ていて、『冬の真昼の静か』(角川書店)。題を見て、ああこれも中原中也のイメージだな、と思いました。

立松 ●そうそう、中原中也ですよ。知ってる人は知ってるよね。「夏の真昼の静か」だったかな、原題は。

牧野 ●中也もやはりかいならすことのできない激情を内面にかかえていました。ぼくは、立松さんのエッセイを読んで、そういう「修羅」の系譜に連なるものを感じました。故郷(くに)というか自分の生まれたところに帰って世間的に見ればマジメな役所勤めなんだけど、内面は沸騰している。そんな感じ。

立松 ●でもね最初から意気込みがあって帰ったってのは、やっぱりそういう生き方ってのは、少ないんじゃないですか。どうにもなんなくなっちゃって帰ってきて、帰ってから考えるとか、実際はそういうのが多いんじゃないですか

『回りつづける独楽のように』(集英社、一九八一年三月刊)

◎帰郷したのは春のはじめだった。それから七回目の冬をむかえる。私生活での破綻を抱え帰郷した時には、何とかやり直そうとする気負いと、文学青年的な自嘲があいなかばし、勤め先の市役所への不満も重なって、自分の足元を掘り起こす辛苦ともいえる作業にはとても耐えきれなかった。あの時の心境は、わが故郷に帰れる日
汽車は烈風の中を突き行けり。
『帰郷』萩原朔太郎
というよりは、
これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる

ね。ぼくは、小説をずっと書いていたけども、初期作品、今でも初期みたいなものだけど、ほんとに初期ね、習作時代、どうにもなんなかった。今でこそ本になっているけども、『早稲田文学』とか『新潮』とかに書いていた頃、早い話が小説家として認められないし、メシも食えないから、どうしようもないですよね、これは。自分の理想と現実とのギャップというのは、あるじゃないですか、青春時代の酷しさとしては。

それから、こっちへ帰ってきて、三年ぐらいは全然書けなかったね。もうやめようと思ったですよ、ほんとに。自分にものを書く力がないというか、ほんとやめる寸前まで行った。それが、栃木のことを書き出してからだね。自分の住んでる身のまわりのことを書き出したら、急に、こう温泉が噴き出すような感じで出てくるわけですよ。今考えると当り前のことだけどね。

牧野●そこにたどりつくまでの時間が長かった。

立松●長いですね。どうなっちゃってんだろうね。苦節十年なんていうけど、俺の場合は十年できかないものね、全部入れると。

心置なく泣かれよと
年増婦の低い声もする
あゝ　おまへはなにをして来たのだと……
吹き来る風が私に云ふ

『帰郷』中原中也

に近い。ああお前はいったい何をしてきたのだ。他人に説明できるようなことは何もしてこなかった。ただ自分でもわけのわからない鬱屈が、しなやかであるべき感性を強張らせ、日々の生活をぎごちないものにしていた。いってもせんない話だ。勤め先の同僚たちは親切で平凡だった。安給料であったが暮らしむきも落着き、これ以上何を望むのかと問われれば、返す言葉もない。

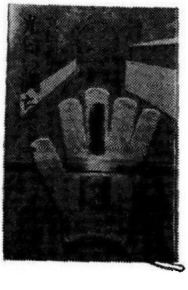
■『光匂い満ちてよ』――引きずってたものを切る

牧野●登場人物になりきって書いていくということでしたが、『遠雷』の主人公なんかにも、初期作品の『途方にくれて』とか『妹』とか、あの頃の作品に出てくる人間がもっている、なんというか、自分の生きている世界にたいする違和感。いわゆるアイデンティティの拡散した激情が形を変えて出てきているように思うんですが。

立松●そうですね、和解しないっていうかね、絶対なれあわないというかさ、なれあうような世の中じゃない、と思ってるしね。そういうことは、別に自分を戒めるほどのことじゃないな、当り前のことだね。

牧野●その、絶対に世の中となれあわないという意識を、立松さんの作品を読んでいて感じます。『光匂い満ちてよ』の主人公もそうですよね。あれは「村雨」の……

立松●「村雨」の前ですよ。あれを書くのに五年間ぐらいかかったんだ。あれは、苦しかったんだ。五百枚くらいの作品ですけどね。ダンボール一杯くらい



『光匂満ちてよ』(新潮社、一九七九年一〇月刊)

書いたよ。書けなくてね。あれを書いて、時間をムダにしたっていうんじゃないけど、まわり道した感じはあったね。結局、いろんなものを引きずっていてね、そういう引きずり方ってのはもうやめよう、もう切っちゃおうと思ったんですよ。中身は切りようがないけど、表面的なものね。つまり学生運動のことは、もう書けても書けなくてもやめようと思ったんですよ。だからあれ以後ないですよ。後から出て本に入るのはあるけど、作品を書いたのは、その前。

牧野●ぼくもこれを読んでいて、一つの段階が終ったんじゃないかな、と思いましたね。それで、栃木のことを素材にした作品。温泉が噴き出すように、それが出てきたということでしたが、その根っこの部分にきたような気がしました。

■風土と言葉——コンプレックスの二重構造

牧野●ところで宇都宮というと、ぼくはたいてい夜行列車で通過していってしまい、今日初めて降りたのですが、関東でもない東北でもない、接点っていうんですかね、北関東の、具体的なイメージがなかなかわいてこないような広漠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook